

大豆の収量品質低下の原因究明と 改善に向けた普及活動

湖北農業農村振興事務所農産普及課

【普及活動のねらい・対象】

管内の大豆は土地利用型経営の重要な作目で、その9割を占めるオオツルは煮豆用として利用されるため、特に大粒が求められます。しかし、湖辺を除く地域、特に浅井地域では収量・大粒率の低下が著しく、当課へ改善策が求められたことから、JA北びわこおよび（農）湯次町生産組合の支援を受けて、原因究明と対策を検証しました。

【普及活動の成果】

（1）実証ほ場の設置

まず、近畿地域の根粒菌は高温に弱い*ことから、8月以降に活性が衰え、地力の低いところでは供給される窒素がなくなることで子実肥大が抑制され、結果として減収、大粒率の低下に繋がっていると仮説をたてました。

そこで、長浜市湯次町に実証ほを設け、原因究明と改善効果のデータを収集しました。実証では、子実肥大期（9月8日）の施肥による収量、大粒率の改善が顕著でした。また、緩効性肥料でも改善を認め、収量、大粒率低下の原因は子実肥大期の窒素不足と断定しました。この他、鶏ふん施用は粒数増となり、肥効差の違いが認められました。

根粒菌活性素材は予想どおり効果が不十分で、この結果を受けて、JA等にて施肥体系が検討されました。

*佐伯・宮崎大学農学部、横山・農業生物資源研究所

（2）対策を講じた地域の状況

栽培前に研修会を開催し、地域課題の仮説と対策を説明し、各々実証に取り組むよう誘導しました。

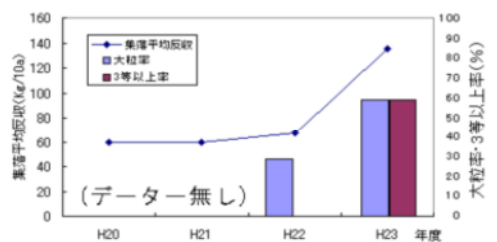
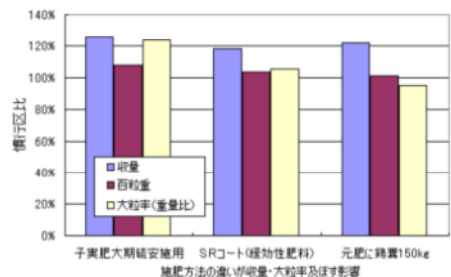
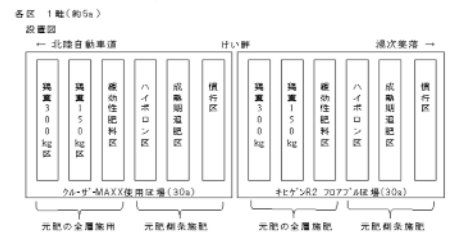
本年は、2度の台風で大豆の収量は低下傾向でしたが、緩効性肥料で対策を講じた栽培者ではおおむね増収し、大粒率もほぼ湖辺並みになりました。

（3）湯次町生産組合の収量推移

生産組合では、播種深度の是正、溝切り、弾丸暗渠施工など作業体系を見直しても効果がなかったことから、仮説に基づき緩効性肥料を使用したところ、収量、大粒率は概ね地域平均まで回復しました。



実証ほの様子



生産組合の収量推移